

もくじ

本編 …… 2 ｝

SS リーサの新しい趣味 ……

SS その手 ……

SS 懐妊が分かった時の王配の反応 ……

SS 王配たちの会合 ……

濡れ場（アンドル＋シャルル×リーサ） ……

あとがきと補足 ……

ある国の女王リーサは王族の窮地に愕然とした。

数十年後、もし子孫がいないと仮定すると王族は自分を含めて四人に減少する。内訳は、女王の自分、弟、従兄その一、従兄その二。従兄その二は同性愛者で女装家である。

君主制をとるこの国では、当然王の独断で政治をすることも法を定めることも出来ず、殆どの国会を通さなければならない。二院制を採用しているものの、実質、懐古主義の老獪たちが牛耳っている。カビた国政に新しい風を吹かせる存在として国民に期待されて即位したリーサだったものの、思うような政策を打つのにいちいち時間が掛かっているのが現状であった。

年配の政治家は王家に偏った理想を抱いていて、たとえば外国人を王配にすると血が薄まるだの穢れるだの国が乗っ取られるだのと騒ぎ立てる。いわゆる純血主義で、強制的に従兄その一が許嫁にされていた。

——外国人と結婚してもうちの国籍とらせて帰化させるでしょ？

古だぬきの説教を受けながらリーサは心の内で叫んだ。

リーサの両親は、はとこ同士である。自分までもが血族結婚をすると子供に異常が出やすくなる上、もはや時代遅れなのだと、第一院——貴族出身者からなる院、元老院ともいう——の院長を説得している最中だった。だが、口の回り方では数枚うわてな院長に言いくるめられそうになっている。

従兄その一——念のため、仲は良好だ——との婚約を破棄させようと説得しても、院長は断じて頷かない。

実は第一院よりも、平民出身者が構成する第二院のジジイどもの方が、王族への幻想を抱いているのだが、普段は反発しあう意見も女王の婚姻に関しては珍しく一致してし

まっていた。

岩のような院長を前に、リーサは怒りで興奮しそうな自分を抑えて言い続けた。

「ですから従兄と結婚することはできません。しょうものなら、このまま王室は断絶します！ 自ら口にしたくはありませんが、あなた方の誇りで、好きな王族が滅び去っても宜しいのですか？」

ふんと院長は鼻を鳴らした。

「それならあなた様の従兄殿に匹敵するような、ふさわしい相手連れてきてくださいよ。そうしたら議会であなたに好意的にふるまってもいい。時間がないと仰るなら、そうですね、三日くらいで？ ま、とうせ見つからないと思いますけどね」

挑発的な言葉で、特に最後の一言によって、カーン！ とリーサの脳内でコングが鳴った。

「分かりました。三日以内にリットバルトに匹敵する候補者を連れてきましょう。達成した暁には私の派閥の代表者になっていただき、色々なお手伝いをしてもらいましょうか」

「よいでしょう」

院長は髭をさすりながら小馬鹿にしたように笑った。

「なんなのよあのジジイ！ 王族派とか言いながら、わたくしに向かってあの態度！」

「まあ落ち着けて」

苦り顔で怒れるリーサをいなすのは許嫁の従兄その一、または父方の堂兄のリットバルトである。ちなみに従兄その二は母方の従兄（表兄）だ。

院長との対話を辞したあと、リーサは王城の別室で執務をしていたリットバルトの元

へ乗り込んだ。

「両親も祖父母も血族結婚で、高祖父母なんか異母姉弟！ 議院の言いなりになっていたらいい加減まずいわよ！ あんたもそう思うでしょ!?」

「そうなんだけどな。まず落ち着けよ」

「存続の危機に暢気にやってられないでしょーが！」

リーサは拳を自分の両ひざに打ち付けた。向かい合わせに座るリッツはため息をつきながら、それを見ている。

「まあな、俺らにもし子供がいなかったら、少子高齢化でうちの王室は絶滅するな。一理ある意見を言う事もあるが、ジジイどもの大半は古い先短気から先を見ようとしなよな」

「そうなのよ。あんただって妹みたいになわたくしと結婚するのは嫌でしょう？ だから

言ってるのに」

「うーん、まあじゃじゃ馬だしな」

齡の離れた弟が出来るまで、リーサは二人の従兄と兄弟姉妹のような関係で育ってきた。リッツはあくまで兄であり、結婚対象に見られるかと言えば首を傾げる。

「苛立つけど、この際婚約がなくなるなら、破談の理由がじゃじゃ馬でも何でも結構よ。今の時代、もっと外を見なきゃ」

「そうは言うけどな、期限三日だろう？ 相手の目星はついているのか？」

「候補は五人いるわ。実は半年前にはプライベートな会談の申し入れを極秘でしているよ。私名義でね。そのうち二人はどうしても折り合いがつかないからと断りを入れられただけれど、残る三人はよい返事をくれたわ。一人は明日、隣国で話に応じてくれるそうよ。それに合わせて休暇も申請したし」

「うわ、さすが話が早いな。で、三人の相手は誰なんだ？」

ぎょっとしたリッツは、姿勢を直して頬杖をついた。

「明日会うのは、事業家のカーライサン・ルーガー。残りは、フーゴー国の前王弟殿下とダイワナ国の現元首よ」

リッツは唸りながら頭を整理する。

カーライサン・ルーガー。ふつうの平民。三十四歳。遠く離れたシュルツ国出身の、世界的に名の知れたビジネスパーソン。総合商社という特殊な形態の企業を統率する若き社長。黒い噂も無いことはないがうまく丸め込んでいる。条件のいい結婚相手を探しているらしい。顔がいい。

アンドリュース・オーガステス・フーゴー。又隣のフーゴー国の前王弟殿下。王の代
替わりで、現在は公爵。四十を少し超える歳。いまでも愛称は閣下。学問に優れる人物で、
考古学博士も兼業。周囲が家の断絶を恐れて結婚をせっつかけているそうだ。顔がいい。

シャルトル・レオポール・ブランシェット。少し離れたダイワナ国の現元首。元首に
選ばれる前は將軍だった。三十九歳。四十歳で次期元首に代替わりする法律があるので、
少し早い老後の選択を迫られている。前に婚約者が不貞を犯して婚約が白紙になって以
来、結婚が面倒くさいようだ。顔がいい。

「紹介が雑だし、年上の穴場ばかり狙っているな。ひとまず二人はいいとして、平民のルーガー殿は厳しいんじゃないのか」

リーサはきよんとしたが、すぐに人差し指と親指で円を作った。

「お目が高いとおっしゃい。お兄様、あんたに匹敵すればいいとジジイは言った。匹敵さえすればいいのよ、言質はとったわ。個人資産はルーガーの方が上よ。あんた、ただでさえお金を持っているから探すのに苦労したけれど」

ビジネスも上手だしね、とリーサは付け加える。

「言葉の裏までついて利用できるものは何でもしようとしてるな」

「そうじゃなきゃこんな足の遅い国、とうに滅びているわ」

怪しく笑う従妹にリッツは複雑そうな顔をした。

「というわけで政治はお姉様に任せてあるし、お兄様の分まで休暇を取ってあるから付き合ってね」

「え、俺も!? こういう時だけお兄様とか調子がいいんだから……」



翌日、リーサとリッツは隣国の宿泊予定のホテルに向かった。隣国とは経済協定を結んであり、国境は無いに等しい。

実は昨晚、急きよアンドリュースとシャルトルから連絡があり、二人とも会談予定日を今日に移したいと言ってきた。普通なら困るのが世の常だが、顔合わせが一日で済む

なら楽だの一言でリーサはあっさり承知してしまった。無理を承知の申し出だったため、どの人物もこちらが指定した隣国に来てもらえるそうだと。

「同じ部屋かよ……」

「どうせ深夜には帰国するもの。予定も急に大幅に変わったし、待機場所としてホテルを予約しただけだから」

「ひどい合理主義だな」

午前九時、チェックインを済ませた後、二人はホテル内の部屋に入った。シンプルで標準的な室内で、広くも狭くもない。リッツは椅子に腰掛け、リーサはベッドに座って足をぶらつかせている。

「フーゴー公爵が夕方の方の到着になるそうだから、午前中にルーガー、午後にブランシェット元首、夜にフーゴー公爵の順番に会うことになるわ。いいわね？」

「いいも何もないだろ。了解したさ」

ルーガーとは一般人が利用するようなレストランで会う予定だ。個室が使えるところをルーガー自ら予約してくれているという。

「おまえ、自分が結婚するかもしれないやつに会うのに緊張していないんだな」

「するわけじゃないじゃない。あつちに話してあるのは是非直接会いたいわ、あとちょっとした相談にも乗って欲しいの！　という気軽なことくらいよ」

「それでよく大物の時間をもぎ取ったな。女王の特権濫用はよくないぞ」

「まだ使っていないわよ、これから使うの。お兄様、時間だわ」

奇妙な返事をした従妹にリツツが問い返そうとした時、時計を指差された。九時半を示している。

「歩いて十五分のところね。もう行かないと遅れてしまうわ。お兄様も来るのよ」

「しょうがないな、全く」

扉の方へ駆け出すリーサをしぶしぶリッツは追いかけた。

辿り着いたレストランの受付で、既に中でお待ちですと伝えられる。

「随分と早いな」

「時間管理には厳しい人だから」

店員に案内された部屋に向かうと、何やら中から話し声がする。店員が中を確認するより先にリーサが扉を開け放ってしまう。

「はあい、カール！」

「おいリーサ！」

リーサを捕まえるためにリッツが追いかけると、電話を耳に当てて固まっている一人の男がいた。赤みの強いブルネットの髪を整髪料で整えた長身の男。リーサを見て目を丸くしていたが、電話口の声で我に返ったらしく一言二言話して切った。電話をしまいつつ、男はゆるゆると立ち上がった。

「ライ、ザ？」

「そう！ お待ちかねのライザよ。……ごめんなさい、仕事の邪魔をしてしまったかしら？」

一転してしゅんと落ち込んだリーサに男が慌てて近寄ってきて手を握る。

「とんでもないよ、なんてサプライズだ。よく来てくれたね、嬉しいよ」

「本当に？」

「もちろんだ。君がこんなに美しいだなんて思いもしなかった。ネイビーのドレスが君

の星のような髪を一層引き立てている」

男は流れるような動作で手の甲にキスを落とす。

「ありがとう。嬉しいわ！」

男が微笑むリーサの姿を一瞥して目元を緩ませる。

やけに親しい間柄に見える。状況が呑み込めないリッツはひとまず店員にチップを握らせて下がらせ、二人の隣に立った。

「リーサ、説明しろ」

「リーサって？　ところであなたは？」

立っていた位置が死角だったのか、リーサしか眼中になかったのか、今の今までリッツに気づいていなかった男が怪訝そうにする。

「彼はマイブラザーのリッツよ。心配だからってわざわざ付いてきたの」

「ああ、手紙によく出てくるお兄さんか。初めまして。ご存知かもしれませんが、カーライサン・ルーガーです」

ルーガー差し出した右手に応じつつ、リッツは「手紙ってなんのことだ。知らないぞ」と従妹^{いもうと}を非難する。

手を握りつつ密かにリッツを観察していたルーガーが固まった。その視線は髪と顔を行ったり来たりしている。リッツやリーサは、限りなく銀に近い白金色の特殊な髪を持っている。国内で特別視されるこの髪は血が薄ければ遺伝する確率も下がるので、古狸たちが血族結婚に固執するのもこのためだった。

ルーガーが恐々^{きょうきょう}としながら尋ねた。

「失礼ですが、お名前を伺っても？」

リッツは溜め息をついた。

「リットバルト・ヴィソン・ベラシュコフだ。よろしく」

世界に一つの王族の名前だ。ルーガーの顔が蒼白になった。元々頭の回転の早い男だが、今はそれが仇となる。

「それじゃあ、ライザは、女王陛下？」

返事をする代わりに、世にも見事なカーテシーで応えた。

おまえな、こうなると思っていたがな、いい加減事後報告をやめろ。リッツの呆れた声が響いた。

リッツの取り成しでどうにか食事にかぎつけた三人は、絶賛『事実の確認大会』中である。

敬語で話そうとするルーガーを、今日は私的な時間だからとリーサが笑う。

「……まさか王族の方々だったとは思わなかったよ。真のサプライズとはこのことを言うんだね。そのライザ、リーサが本名、なんだよね？」

「ええそうよ。リサゲルデ・ルサ・カガンヅィナ。リーサはその愛称。手紙には『Lytha』と書いたのだけれど」

「それを俺が読み間違えたんだね。浅学で恥ずかしい限りだけど、会えて嬉しいのは本心だよ。俺もリーサと呼んでいいかい？」

「もちろんよ、カール」

心なしかまだ青いルーガーは、ようやく安心したように頷いた。そしてリッツの方を向き、深々と頭を下げた。

「遅れましたが先程は大変なご無礼を致しました。どうかお許しください」

「あんなの失礼のうちにも入らねえし、リーサの言う通りプライベートだから気にするな。どう考えても説明不足だった俺たちが悪い。すまなかったな。リッツとか、俺の事も好きに呼んで肩の力を抜いてくれ」

「ありがとう、ございます。名前が長いので、私の事はカールカルーガーと」

「カールだな。改めてよろしく。それと俺はリーサの実の兄じゃなくて父方の従兄だ」
リッツがにこにことしているリーサに問う。

「で、手紙って？ どうやって知り合った？」

「カールとは三年間、文通をしていたの。途中からはメールや電話でね。彼は猫の愛好家で、興味を持ったから連絡を取ることにしたの。うちにも猫の園があるし、そういった話をしたら意気投合したのよ」

「そうなのか。いい縁もあったもんだ」

自由の花嫁

言っている事は正解と嘘が半々だろう。三年前のカールはまだ社長ではなかったもので、彼の将来性に目を付けたのかもしれない。リッツは感心したように装いながらそう考えた。

それからは段々と和やかな雰囲気になり、他愛もない話が飛び交って笑い声が聞こえるようになる。

リッツがカールに尋ねた。

「普段から忙しいだろう。顔も知らねえ相手の誘いに、どうしてわざわざ応じたんだ？」
「確かにリーサは三年間一度も写真をくれなかったけど、それは事情があるんだろうと思っただけにすぎなかったよ。文面から聡明な女性だっていうのは知っていたし、俺の中では隣人のような親しみを覚えていたから躊躇いは無かった。それに、そんな相手から会えないかって言われたら嬉しく思うものだよ」

「カールにそう思ってもらえたなんて光栄ね」

リーサの言葉に対し、カールは少し照れくさそうだ。

リーサとちらりと視線ががち合うと、リッツは『脈ありだ』と半目で頷いてみせた。
リーサが突然真剣な表情になる。

「ここからは真面目な話なんだけど、二つお願いに近い相談があるの」

「言っていたね。なんだい？」

「わたくしの国にあなたの企業を招致したいの。支社がまだないでしょう？」

笑んではいるが、カールの雰囲気は鋭くなった。恐らくこれが大企業社長としての顔で、脳内の算盤が猛スピードで弾かれているに違いない。

リーサの治める国は先進国ではあるが、様々な綻びが出ており、政策が施行されるのも遅く、一部では斜陽の国とも揶揄される。リーサは必死にその現状を破ろうと尽力し

ている最中だった。

たとえばね、とリーサが長所が変わりうる自国の短所を挙げていく。カールは多角的な商売を展開する総合商社のトップである。改善の余地がある短所はビジネスを産むため、女王はそういった切り口から攻めている。

カールはリーサのプレゼンを真摯に聞いている。リーサは更にそこに自国の強みと、将来的に展開する予定の政策を付け加える。

一通り話を聞き終えたカールは目を細めた。

「確かに君の国に参入するメリットは沢山あった。採算も見込めるだろう。でもね、それはあなたの言う、将来的に施行されるかもしれない経済政策の優遇があつてこそだ。出来なかった場合はどう考えてるの？」

リーサは指を二本立てた。

「そこで二つ目の相談なのだけど。わたくしと婚姻を結んでくだらないかしら」
いきなりの展開に何度も瞬きするカールが趣旨を理解して顔を赤らめる。

「あなたが好き」

さらにリーサは畳み掛けるように、例の話をする。

「実は元老院の長老が結婚をしぶるわたくしに痺れを切らして、一刻も早く結婚しろと言うの。婚約者を見つけないと政策も通さないようにすると。わたくし、好きでもない相手と添い遂げるのは嫌……」

話しているうちに涙を浮かべるリーサに、カールは眉を下げた。一方でリッツは、表の裏の裏が表だからといって裏を話していい訳じゃないぞ、と内心で頭を抱えた。

リーサはとうとう泣き出した。

「ごめんなさい、忘れて。わたくし我が儘だったわ。あなたにも想い人がいるはずなの

に、こんなことを言っても困らせてしまうわね」

カールは何かを決意したような眼差しで立ち上がると、隣まで行つてリーサを抱き締めた。

「そんなことはない。商売人だから説得力に欠けるかもしれないけど、損得勘定抜きに、俺は君に惹かれている。君との手紙のやり取りは、疲れた心の抛り所のようなものだった」

その言葉にはっと顔をあげてリーサはカールを見た。目が合うとカールは優しく微笑んだ。

「リーサは聡明で美しく、愛らしい。俺はそのリーサが好ましいんだから、君が誰があつても、どの地位にいても俺は構わないよ」

リーサは首を振る。

「カール……。でも、駄目よ。わたくしのひいお爺様は何人もの奥さんを娶らされていったもの。もしあなたとの結婚が認められたとしても、長老たちに他の人とも無理に婚姻を結ばされてしまうかもしれない。あなたの祖国の道徳に反してしまう」

「それなら君の国の文化に従うだけだよ。複数の配偶者を持ったとしても、君はきつと公平に全ての人を尊重し、愛するだろう。……。それならいい」

カールはリーサの涙を指先で拭う。

「ごめんなさい、本当にごめんなさい、カール」

「ありがとうと言って笑ってほしいな」

「……ありがとう」

涙を流しながらも、リーサは花がほころぶように笑った。

ただのレストランの個室は、今ではあまりに清らかな空気で満たされていた。――リ

ーサが女王の顔を出すまでは。

リーサは目を細めてカールを見上げた。一見愛するひとをうつとりと見つめるように思えるが、リッツの目には狩人にしか映らない。

「ねえカール。もしも結婚したら、好きなようにわたくしを利用してちょうだいね。婚姻だけでは割に合わないと思うから」

言葉にはされていないが、少し考えればわかる。同じだけこちらもあなたを利用するわね。リーサはそういう趣旨で言った。

リーサにリッツと同じものを感じ取ったらしいカールは笑いだした。ひとしきり笑うと額を押さえた。

「あー面白い。まいったな、一回り以上年下の女の子にしてやられるなんて。こんな奥さんがいたら毎日が楽しいだろうね。でもまだ甘いかな。家に帰るまでが遠足っていう

のと交渉は同じだよ」

大袈裟な身振りでリーサは手で口を覆った。

「まあ困ったわ……。古狸どもを抑え込む共犯者になっていただきたかったのに」
どこかの部分が笑いの壺を突いたのかカールが再び笑い出す。

「そうか、最初から仕組まれていたんだね！」

「そんなあっさりでいいのか！」

「いいんだよ。そういうところも魅力的に思っちゃ俺の負けだな。ビジネスについても後で打ち合わせる時間を取ろうか。さあどうしよう、俺もまだまだ未熟者だ」

「なんか申し訳ないな」

「いやいや。こんなに素晴らしいパートナーが見つかるとは思ってなかったからね、今日はとても楽しい日なんだ」

何とも言えない顔をしているリッツに、カールは晴れ晴れとして言った。

「リーサ、おじいちゃんたちに勝機はあるのかい？」

リーサが胸元までドレスの飾りボタンを開くと、豊かな谷間から極小のチップが入った袋を取り出した。

「言質は取ってあるわ。後は三日以内に相手を手を連れていくだけ」

「うわあ。映画みたいな光景だね」

「感心するところじゃないだろ」

驚くカールにリッツが呆れる。再びチップが収納され、何事もなかったかのように整えられる。

「おまえもどこまで用意しているんだ、全くもう……」

「心外だわ。それくらいは当たり前でこなさないで長老はいなせないもの。お兄様はわ

たくしよりも抜かりないでしょう？」

「長老は暴れ馬だったのか。どうだかね」

カールが笑いを堪えているので二人のやり取りはそこで終わる。

「いつもはそんな感じなんだね。策士の君もいいけど、素直な君も素敵だよ。惜しいなあ、もうそろそろ刻限だ」

「そうだったわね。またあなたの時間をわたくしにくださる？」

「勿論だよ。すぐにでも会えるなら会いたいさ」

「カールったら」

文通していたとはいえ、初対面で胸焼けがしそうなやり取りをしている光景にリッツは眩暈を覚えた。

その後ホテルに戻ったリーサらは、先程と同じ場所できつろいでいた。

「なんで正体隠して文通していることを前もって言わなかったんだ」

「作戦のうちよ。万一計画が漏れたらサプライズって言わないじゃない。相手に自分を印象づけたければ、それくらいしなきゃね」

リーサは肩をすくめた。

「おまえ、いつから企んでいたんだ？」

「十年以上前よ。別の国で王族が絶えたってニュースを耳にして、わたくしの国も他人事ではないのだと気づいたの。カールを一方的に知ったのは彼がたびたび功績を報道されるようになってからね。付き合いは本当に三年前からよ。猫の園を管理する侍女の人脈に、カールの名もあったの」

リーサがベッドに寝転がった。そのまま目を閉じる。

「皺になる。当時は社長でもなかっただろ？」

「着替えればいいじゃない。……カールが若いけれどあちこちで経験を積んで、その後ヘッドハンティングされて幹部に迎え入れられたのは知っていたわ。将来的にトップに昇り詰めるとは思っていたけれど、予想外に早かった。狸が結婚結婚って騒がなければ、もう少し穏便に進めるつもりだったのに」

「……」

カールがほんの少しの間、黙り込む。やがて何かを言おうと従妹を振り向くと、静かに寝息を立てていた。

「愚妹め」

カールはため息をついて苦笑した。

一災起れば二災起るもので。やはり午後に会ったブランシェット元首と文通していた事実をリッツは知らされておらず、ブランシェット元首も今日会食する相手が王族であることを全く知らなかった。

カールと異なったのは、元首が大口をあけて大笑いしたことだ。

「はっはっはっは！ 何かあるとは思っていたが、そうか女王陛下だったか！ 国交で何度かお会いしたことはあったが、全く気付かなんだ。渾身の決闘で負けたような清々しさだ」

「本当に何と言っているのか。元首の寛大さにはいつも頭が下がります」
リッツが恐縮していると元首に肩を叩かれる。

「我が国と貴国の仲ではないか。今日は気安い場だから、リッドバルトもシャルルと呼んでくれ。私も陛下のようにリッツと呼ぼう」

「リーサとは呼んで下さらないの、シャルル？」

「これは失礼した！」

シャルルが再び笑い出した。

シャルトル・レオポール・ブランシェットは明朗快活な性格で、国主という立場から非常に付き合いやすい相手だった。元が軍人だが、非常に柔軟な思考と対応力を以て統治している、為政者の鑑のような男である。意外にも筆まめで、文通期間が最も長く、返事もきつかりと一週間で寄越す。

「シャルル、あなたと国の長として親交を結べるのもあと僅かだと思うと寂しいわ」
「そうだな。あなたと同じ気持ちだ」

シャルルの顔が僅かに曇る。

「あなただから言えるが、後継の者に少々問題があつてな。努力家で才は十分にあるのだが、頭が固くやや融通が利かない。二十五と年若いこともあるだろうが、あれでは相手の挑発に乗りかねないのだ」

「大丈夫。大きなものを背負うのだから今は気を張らざるを得ないだけで、いずれ肩の力が抜けて周りが見えるようになるわ。国を動かすという感覚は、実際に地位に就いた者にしか分らないものよ」

リッツも同意した。

「経験していく中で身に付くものだと思います。心配な場面があれば、あなたが導けばいいのではないですか」

「うむ。だがなあ、私がやすやすと手を貸すわけにもいかないだろう」

シャルルの国は四十歳を境に元首が入れ替わる。昔その法律が無かった頃、一人の元首が長年に渡り国を治めた。最初の二十年は賢君だったが、それを過ぎると私欲に走って国を荒らしてしまった。その時の反省として自制できる年齢を四十とし血縁の無い者に交代する法を設けた。それは絶対であり、シャルルのような名君を生み出すこともあるが、若い後継者の心もとなさに頭を悩ませる要因にもなっている。

そして、先の元首が後継者を指導することを良しとしない風習がある。宗教上の価値観で、一度成人すれば自力で判断し事を成さねばならないという考えが深く根付いている。シャルルの国では二院制ではなく元首と数十人の選抜された者が合議して方針を決めていくため、元首は誰より強く、集団を取りまとめる力を持たねばならない。社交性で国をまとめるシャルルの方が珍しかった。

「そうかしら。少し先入観から自分を解放してみてはどう？」

リーサの提案にシャルルは「先入観か」と反芻する。

「シャルル、あなたも深みにはまっているのよ。民主主義をとる国が大半の現代で、力による治世は少し過ぎるのだわ。あなたの素晴らしい長所を、後継者にも見せてあげて欲しいの」

瞠目したシャルルが吐息を漏らす。

「あなたと話していると己の歳を忘れそうになる。そうだな、そうはない時間に焦り、近寄りすぎていたのかもしれない。やり方を見直してみよう」

シャルルがリーサの頬に手を伸ばし、ゆったりと撫でた。

「その歳でこれだけ達観しなければならず、あなたも随分と苦労しているのだな」

「ええ、とてもね」

「はっは、正直だな。少しは手紙の中のように、相応の自分に戻る時間を設けたほうが

よいのではないか？」

目を伏せたリーサがシャルルの手をそつと両手で包み込む。

「どうすればいいか、分からなくなってしまったの」

シャルルは静かに、まっすぐとリーサを見つめている。

「シャルルへの手紙を書いている時、とてもね、楽しかった。紙を丁寧に折って、封筒にしまつて、蠟を押してしまうと、ふつとその感覚がわたくしの中から消え失せてしまふ。忙しいシャルルにたくさん、毎日手紙を書くわけにもいかないわ」

「毎日でも構わないほど、リーサとの手紙は楽しかった。あなたは威厳に満ちて美しい女王だと思っていたが、文通の中の少女もまたあなただと知った今はそうは考えられないのだ。どちらの面もあなたそのものなのだよ、リサゲルデ」

シャルルはゆつくりとリーサに言い聞かせる。リーサが潤む瞳で彼を見た。

「わたくし、分らないわ。教えてくださる……？」

「リーサ……」

リッツは遠くを見るように目の前の光景を眺めている。口を開く元気もないようだ。だがシャルルの様子が変わる。どこか自嘲するように呟いた。

「あなたの気持ちが多まらなく嬉しい。だが、私は結婚に失敗している。あなたにうまく伝えられる自信がないのだ。こんな年齢にもなって情けない話だが」

シャルルはどうとうと語る。過去に婚約者に裏切られている。若く国政に奔走している時期の話であり、それが原因で婚約者に別の男を求めさせてしまった。婚約といえど不貞は厳罰に処されるはずだったが、相手とともに国外に追放することでそれを防いだという。それ以来、国主であることは女性を不幸にするとはい、特定の関係を持たないようにしている。

彼の優れた社交性が、自身を苦しめる毒となった。

リーサは尋ねる。

「わたくしが信じられるかしら？」

「私はリーサを強く信頼している」

「そうよね。あなたの信頼をわたくしはどうに受け取っているわ。なら私の信頼も受け取ってくれる？」

シャルルはしばしの黙考の末、もちろんだと返事をした。リーサは満面の笑顔を浮かべた。

「ありがとう……！ 誰かを信じられるのだもの、大丈夫。もし心があなたを裏切りそうになったなら、この約束を思い出して」

「そうだな」

リーサが自らの小指とシャルルのそれをきゅつと絡めると、シャルルは小さく笑った。随分と綺麗に丸めたな、とリッツは感心する。

「四十歳を迎えて退位した後、あなたはどのような？」

「通例では生涯に渡って報奨金を貰いながら隠居生活に入るのだが、後進の育成にあたる以外にさっぱり想像できないのだ」

「それは国内でなければできないことかしら」

「いや、通信手段が発達した今ならどこでも問題ないだろう。膝をつき合わせなければならない時は国に帰ればいい。そうだな」

そこでシャルルが膝をついた。リーサの手を取る。リッツが思わず腰を浮かせた。

「あなたにここまでされて、私も男の筋を通さねばと思う。私はとうにあなたを愛している。どうか私の求愛を受け取ってはくだらないか」

驚きのあまり言葉を失っていたが、やがてリーサが涙を零した。

「その涙は哀しみのように思える。泣かないでくれ」

「シャルル。わたくしは未だに不甲斐ない女王よ。あなたと結婚したとしても、元老院が息のかかった者とも添わせようと強いてくるでしょう。すぐに結婚しなければ国政を動かすべからずと告げられている今、わたくしの手にある抗う手段は皆無に等しいわ」

シャルルに涙を拭われながら、リーサは顔を俯かせる。息のかかった者である当のリーサは思わず口を押さえた。

「私の可愛いリーサ。私はあなたがこの先の生涯にいてくれればいいんだ。名声が地に落ちようとも構うものか。とうに覚悟は決めている。あなたの瞳が私を映す限り、共にいたい」

「それでもいいの、シャルル……？」

「いいんだよ、リーサ。あなたはもつと大人を頼るべきだ。私もあなたを頼るから、どうか私に寄りかかってくれ」

戸惑うリーサにシャルルが固く頷いた。

シャルルに抱き締められたリーサは、震える手を大きな背に回した。

ホテルの部屋の定位置に落ち着いているリーサとリッツは、窓の外をぼんやりと眺めている。煌々と夕日が街を赤く照らしていた。

「元首……いやシャルルに言っていないだろ。おまえの本性というか、腹黒さというか」
「あんたほんと口が悪いわね。シャルルは女王としての顔の多くを見ているわ。どんな性格かなんて承知の上よ。もし彼と結婚するなら、これから嫌というほどあんたの言う

腹黒さを見ることになるわ」

「シャルルも何だかんだで為政者だしな。おまえと似通った部分もあるんだろう」
そうはいいつつもシャルルの健やかな日常を祈らずにはられない。

「おまえ、誰と結婚するか決めているのか？」

「まだ一人会っていないわ。それからじゃないと判断が出来ない」

「そうかいそうかい」

それ以降会話は途切れ、二人は静かに夕日を眺め続けた。

二度あることはやはり三度あった。

最後に会ったフーゴー公爵とリッツは情報の伝達の不十分さを思い知った。慣れ果て

たリッツが事情を説明すると、公爵は怒るでもなく柔和に微笑んだ。

アンドリュース・オーガステス・フーゴーは長身瘦躯の、非常に紳士な男だ。縦横に体格のよいシャルルとは異なり、上背があるだけのように思われがちだが、世界各国あちこちの遺跡を渡り歩いて調査をするため、持久力と根気が尋常ではない。元王弟殿下であることを誇ることもなく腰を低く保つので、多くの人間に好かれているのだった。

「そうでしたか。私の親愛なるペンフレンドは女王陛下、あなただったのですね。前に公的な場で一度食卓を共にしましたが、若く力に溢れた、素晴らしい方であったと記憶しています」

「閣下、誠に申し訳ない」

謝罪するリッツに、公爵はゆるりと首を振った。

「宜しいですよ。敬愛申し上げる方が私の友であったと知ることが出来、とても光栄

です。歓迎すべきことを、喜ばない者がいるでしょうか。でも実は、密かにあなたがそういうのではないかと思っていたのですよ」

「まあ」

公爵は片目をつぶってみせた。

「確か、ベラシユコフ殿、あなたは敬愛するリーサに愛称で呼ばれているそうですね。私にも教えてもらえますか」

「恥ずかしい限りですが、リッツと呼ばれています」

「覚えやすくもいい名前ですね。私もぜひそう呼ばせてもらいましょう。後はもう、お分かりですね？」

公爵に目尻を下げたが、リッツはどうすることも出来ず、リーサに尋ねた。

「リーサ、手紙では閣下を何と呼んでいたんだ」

「栗毛のアンよ。博識で、たくさんの面白い話を聞かせてもらったわ」

「閣下は栗毛じゃなくて金髪だろう。それに女性名じゃないか」

「冗談よ。アンドルと呼んでいたわ」

「こんな時に冗談はやめてくれ」

アンドルの調子に便乗したリーサにリッツは嵌められる。その様子をアンドルは微笑ましそうに見ている。

「手紙を書くとは人は饒舌になるものですが、冗談好きな姿は手紙の中のアナタと同じだ。とても健やかで可愛らしい」

「騙されないでください。いつもこんなものですし、口も悪くて」

「リッツったら信じられない！」

リーサが頬を膨らませた。リッツがそれをつつくと、更にリーサがむくれる。

「あなたも是非触ってみてはどうですか。風船みたいに弾力がありますよ」

「そうですか？　少し失礼して。どれどれ」

アンドルが頬に触れると、滑らかではりのある肌の感触が指先に伝わった。

「柔らかいですね」

「裏切った！　アンドルまでお兄様に乗ったわね！」

「さっきの仕返しだ」

「なんてこと。可愛い妹に対して非情なお兄様だわ！」

リーサは腕を組んでそっぽを向いた。また頬を膨らませている。そこをアンドルが再度つつくと、徐々にリーサの肩が震えだす。

「絶対に許さない、んだか、ら！」

リーサが堪えながら捨て台詞を吐いたが、最後には嘔き出して笑い始めてしまう。そ

れにつられてリッツとアンドルも笑い出す。

「リーサが始めたんだろ」

「いえいえ、私が発端です」

「まあ、いけない方！」

リッツが女性のような高い声で言うと、皆のたがが外れて暫く笑いが止まらなくなってしまう。

ひとしきり笑うと、腹を擦りながらアンドルが言った。

「こういう他愛のないやり取りもいいものですね。長く疎遠でした」

「アンドルにも研究の同士がいるでしょう？」

リーサが尋ねるとアンドルが否定する。

「いえ。発掘の仲間とは謎を追及する楽しみや発見を共有する喜びはあれど、学生時代

に得ていた関係とは大きく違うものです。貴族として付き合いのある者とバーや宴会に行けばまた話も異なりましようが、私は酒類をたしなみませんので」

屋敷に使える者たちとも長い付き合いがありますが、主と従う者の垣根は越えられないものです。アンドルは言った。

「結婚をする気はないのかしら？」

踏み行つた質問をするリーサにリッツが慌てるが、アンドルは穏やかに答えた。

「さあ、自分でも図りかねます。王弟であつた頃は公務に、公爵になつたおりには仕事や趣味に没頭してきました。兄ほど子孫を残す必要に迫られていませんでしたから、今思えば暢気なものでしたね。この付き合いの楽しさを知らなかつた時分は良かったでしょうが、これからは寂しさを憶えてしまうのでしょうか」

アンドルの静けさの中に、リーサは孤独のようなものを感じ取る。そのままアンドル

の手を握ると、青の美しい視線が注がれる。

「単刀直入に言うわ。わたくしと家族になることを、考えてくださらない？」

「あなたの、家族に？」

アンドルは目を瞬かせた。

「ですが私はとうに四十を過ぎ、人生の半分を既に折り返した身です。若く輝けるあなたの時間をふいにしてしまうでしょう。私にはそれが耐えがたい」

リーサが絶望したような表情になった。

「……わたくしにも問題がいくつもあるの。特に酷いのは、元老院に婚姻を結べと迫られていること。明後日までに婚約者を決めないと国を乗っ取るぞと脅されているの。たとえ婚約者を連れて行ってその方と結婚しても、多重結婚をしていた曾祖父の例を持ち出してきて、元老院の連れてきた人物とも婚姻関係を結ばされるでしょう。今のわたく

しでは老獪な長老たちに対抗する力はないわ……」

リーサは顔を覆ってしまう。

段々と話の内容が誇張されてきているようにリッツは感じていた。

「その元老院が連れてくる相手というのは？」

アンドルが尋ねると、リーサはリッツを振り返った。いきなり話を振られたリッツが硬直する。

「リッツ、あなたなのですね」

「え、ええ……」

微妙な表情でぎこちなく頷くと、アンドルはリーサに視線を戻した。そして真剣な声で問いかける。

「自分が無欲な人間だと考えていましたが、とんでもない。強欲な者でした。地位と研

究以外に何もない人生を送ってきましたが、リーサ、あなたは私に何を与えてくださいますか」

顔を両手でくるまれ、そっと上向けられる。リーサはただどしく答えた。

「色々あるけれど、確実に言えるのは、家族という形と、あなたの、子を」
恥ずかしくなったのかリーサは目を逸らす。

「それらは私にはあまりに眩しく、過ぎるものだと思います。空虚な私でもいいと言ってくれるのなら、リーサ、」

アンドルはリーサの耳元に口を寄せ、そっと囁いた。

「――私の残りの生涯を、あなたに捧げます」

リーサが顔を紅潮させ、動けずにいると、アンドルはふっと吐息を漏らす。

「私に返事を頂けませんか？」

「で、でもね、アンドル。もしリッツのほかにも」

「夫が出来たらどうでしょう、でしょう？ 家族が増えたと思えばいい。願っても無い事です」

リッツにも聞こえないような声でアンドルが呟いた。

——でもね、本当は私以外に夫がいるのは酷く口惜しく、嫉妬してしまうでしょう。アンドルが離れるとリーサは今度こそ顔を完全に隠してしまう。

「それだけ憶えていくだされば十分です。」

「どうしてあっさり決められるの？」

「SNSで数年やり取りをし、結婚を決める人々もいます。六年も文を交わして、この場で恋に落ちていたことを自覚した、では駄目でしょうか。確かに私には今でも縁談の話があります。ですが家族を作るなら、私が敬愛してやまないあなたがいい」

ばか、と非難の声がリーサから上がる。

「……アンドル、ありがとう……」

小さな声でそう言うと、アンドルは嬉しそうに頷いた。

二人はホテルへの帰路についていた。

「最後だけ手の上で転がされていた気がするな」

「うるさい。そう言うなら助け舟を入れてくれてもいいでしょう？」

流石に歳と経験の

差には勝てないわ。もっと頑張らなくちゃ」

「そのままでもいいと思うぞ」

「万が一にも私の代で滅びたらどうするの！」

「へい、すいません。それで、誰に決めたんだ？」

リーサはため息をつく。

「みな理想的で、誰か一人に絞るのも勿体ないわ」

「おまえ、まさか」

「曾祖父が親の高祖父母を嫌って、外部から娶った複数の配偶者を持っていた。その時は男王だったけれど、女王にも適応できないかしら」

「はー……」

リッツは目頭を揉んで溜め息をついた。内心で恐れていた事態が起こりそうである。

「それにね、お兄様。わたくしのこと、嫌いではないでしょう？ 結婚してくださらない？」

「はあ？ おまえ、あれだけ婚約を破棄したいとか言っていたじゃないか」

その時、リーサがリッツの股間を撫で上げた。信じがたい目をしたリッツが離れようとしたが、既にリーサは従兄あにの腕を強く掴んでいた。

「わたくしの名前を呼びながら自分を慰めているの、知っているのよ」

「なっ……!？」

リッツは瞬く間に顔を赤らめ、おぼつかない口調で詰め寄った。

「おお、おまえ、なんでそんなこと知ってんだよ？」

「夜中に部屋に行ったら声とか粘着質な音が聞こえたのよ。妹や家族としてではなく、むしろ結婚できるという意味で好いているのではない？」

「毎回ノックも無しに入って来るな！ もしそうだとしてみな、あんなだけ言っていた子供はどうするんだよ!？」

「ゲノム編集でも何でもすればいい。手段が無いわけじゃないし、カールの会社がその

分野に長ける伝手^{って}を持っているわ」

「……っ、おまえな、倫理もへったくれもないな」

「わたくしの性格を一番ご存知なのはお兄様ではなくて？」

撫でられている部分が固く芯を持っており、真実を物理的に告げている。

リーサは狩人たる女豹のかおで従兄を見上げてきた。

「返事は？ わたくしのことをどう思っているかも併せてね」

持てる反論をなくしたリッツが舌を打つ。そしてやけくそ気味に答えた。

「ちくしょう、好きだよ！ ついでに結婚も承諾だ！ これでいいだろ。こんな悪女だと思わなかったぞ！」

「女にはいくつも顔があるものよ。これでジジイどもも黙らせることが出来て一石二鳥ね」

ほほほ、と貴婦人を真似てリーサは笑った。

精神的な打撃をくらい、項垂れたリッツが呟く。

「一応分かつてはいるけどさ。そうだよな、俺と結婚するなんて政治的な理由だけだよ……」

「はあ？」

歩き出していた足を止め、リーサは眉を吊り上げた。

「好きよ。こんなにちよろくて妹に甘い馬鹿な人だもの。放っておけるわけじゃないじゃない」

振り返りざまに言うと、リーサはすたすたと行ってしまう。

「へ？」

呆けてその背を見送りながら、リッツは立ち尽くすことしか出来なかった。

ホテルの一室に入った際に、リーサのいたずらでリッツが締め出しを食らいそうになる。

この野郎！ と背中から逃げるリーサを捕まえると、疲れを感じさせない軽やかな笑い声を上げた。

だがそれきり動かなくなった従兄あにに、「お兄様？」とリーサが呼びかける。

リッツはリーサの首にそと腕を回して体を密着させた。

「俺は一回り以上も年下のおまえと初めて会った時、なんて生意気なんだろうって思ってた実はあまりいい感情を持てなかった。ちっこいガキが対面早々、口頭一番で『あっただれ？』だぜ？ ふざけるなっていうかさ」

悪辣な内容に対して、話す声は酷く静かで優しい。

「そいつがちょっとしたことでも泣くし喚くし、しかも俺の足にひつついていつも離れないんだ。そんなだけ懷かれて可愛く思わねえやつがいるかつての。昔はただの、ちびで可愛いがきだったのに、こんなに成長しやがって。まったく」

「……こんなになって、わたくしが美しいって事？」

冗談のつもりで言ったのに、リッツは掠れた声で「そうだよ」と答えた。

「一院からおまえの婚約者に命じられた時の俺の気持ちが分かるか？ 涙鼻水寝しょんべん全部綺麗にして、」

「ちょ、ちよっと」

「飯食わせて、脱げた靴履かせて、勉強見て、でっかくなったらなっただ補佐して、俺が全部はじめて面倒みてきた、こんなに綺麗で、可愛くて、最高の女が、自分の嫁さん

になるんだぜ。嬉しくもなるだろ。――それを当の本人から破棄するって言われた気持ちも分かるか？ 少しの悪態くらい許せよ」

詰まったような声色であり、リーサは何も言い返すことが出来ない。

リッツが溜め息をついた。

「それで我慢してれば、上等な男を三人も落としてきて。目の前で見せつけられて。これ以上どうしろと。無理だろ」

リッツが耳を噛む。噛んだところを、舐めあげた。湿った音が脳に直接届いてしまい、リーサが身じろぎする。

「ほかの奴らに、俺がこれから独り占めするつもりだったおまえの初めてを譲り渡すなんて気が狂いそうだよ」

「お兄、様っ……」

従兄^{あに}の熱く、固いものが押し付けられた。

「おまえが俺が必死で閉じていた蓋をこじ開けたんだ。責任取って、おまえを全部俺にくれ、リーサ」

初めて見た従兄^{あに}の男の顔に戸惑いながらも、リーサはゆっくりと頷いた。

体の向きを変えさせられて向き合うことになる、リッツがおかしそうに笑いだした。

「な、なによ」

「顔真っ赤。可愛いな」

頬をそっと包まれると、触れるだけの口づけを落とされる。

その晩、深夜には帰国することになっていた予定が変更され、ホテルで一夜を明かすことになる。

ベッドに丁寧に寝かされてから、服を一枚一枚脱がされて、体をひと撫でされるたびに、綺麗だ、可愛いと告げられる。

胸の中いっぱい褒め言葉が降り積もり、もういい、と涙目で抗っても、言い足りないと言ってしまう。

胸への愛撫、体への愛撫、そして受け入れるための愛撫、どれ一つをとっても途方もない時間をかけて行われた。

指を三本受け入れるようになっただけでは飽き足らず、秘部の全てを舐められ、中まで挿^{なぶ}られた。おかげで下半身がぬるついて気持ちが悪い。

途中で顔を紅潮させて涙を零すと、すぐに吸い取られてしまう。一体目がいくつ付いているのだろう。

シャルルに婚約を承諾されて少し、リッツに赤裸々に心情を吐露されてから完全に自分のペースを崩されているようにリーサは感じてならない。いつもは簡単に受け流せるような賛美でも、今はひとつひとつがダイレクトに刺さって来る。感情が制御できずにつらい。

せめてはしたない声が漏れないよう歯を食いしばろうとすると、指を口腔に含まされて舌を弄ばれる。従兄あにの指を傷つけることなど出来ない^と知っているくせに。くぐもつて醜い喘ぎすら聴きたいだなんて非道だ。

先程もさんざん解ほぐした秘部に二本の指が沈められていく。そしてなかほどで止め、確認するかのよう^にに指先で薄い膜をなぞる。

指を引き抜くと、未だに着衣を乱さないリッツはようやくスラックスに手を掛けた。ぼやける視界でもわかるほどに局部が張り詰め、布を押し上げているのが分かる。当人

は眉をひそめて何かに耐えているようであり、リーサの頭に昔怪我をしたリッツが蘇る。その時は痛そうに顔をしかめていた。慰めないといけない。自分しか彼を癒せる者がいないのだから。

リーサはリッツに向かって手を伸ばした。

「くる、しい……？」

リッツがはっとしたようにリーサを見る。額に汗を浮かべながら、リッツは薄く微笑んだ。

「ああ。とても苦しいんだ。リーサの大切なものを俺が貰ってもいいか？」
安心させるように囁かれてリーサはゆるゆると頷く。

「それでおにいさまが、らくになるなら、いい」

リッツが返事をする代わりに向けられた手を絡め取る。だがそれもすぐに離されて、

空気が掌を冷ましてしまう。

足が抱えられ、付け根に熱いものが当てられた。数度上下に熱が動かされ、何かを見つけるとそこにぐっと押し入ってくる。めり、と音がしたような気がした。

「ん、んう……っ！」

リーサが顔をしかめて呻いた。入ろうとしてくるソレは、狭い場所を無理やりに拡げようとしている。とても痛い。痛すぎる。どうにか目を開けて確認すれば太い棒のようなものを付け根に押し込もうとしている。そして一向に進む気配がない。

男の低い声が耳に入る。ぐっと強めに押されて体が少しシーツを滑った。棒が僅かに進んだようだ。痛みを流そうとしてシーツにしがみ付くと、こちらの様子に気づいたらしいリッツが痛い場所から上の方を擦った。練り物のように捏ねられると体が勝手に跳ねる。そちらに気を取られている隙に腰骨を掴まれてまたぐっ、ぐっとされる。

「ひうつ」

ぐぶ、と詰まっていた部分が中に埋まった。衝撃で体が硬直し、リッツも苦しそうな表情になる。彼の上体が覆いかぶさってきて、指先で貼りついた髪を避けられる。視線が交わると、ごめんな、と囁かれた。口が『悪い言葉』を吐きそうになり、きゅっと引き結ぶ。返事をする代わりに小さく首を振った。

荒れる呼吸をどうにか鎮めていると、またリッツの腰が動かされ、ずぶずぶと湿った音が立つ。侵入してくる熱が、少しずつリーサの体を火照らせていく。

途中でリッツが動きを止め、リーサを覗き込んでくる。目を細めたかと思うと、口づけを落とされた。何度も啄むように唇を吸われ、やがてぬるりとした厚みのあるものが入ってきて、リーサの舌を絡め取った。初めての経験ばかりで余裕のないリーサを気遣うように遅々とした動きで口の中を弄もよほられる。しかしようやくそれが自分と同じリッツ

ツの舌だと理解する頃には、舌同士がもつれ合い、呼気を奪われ、唾液を注ぎ込まれるようなねっとりとしたものに变化する。

「ん、んむう、はっ、んんん……」

息の吸い方が分からず、苦しさにリーサは喘いだ。逃れようとしてもまたすぐに塞がれてしまい、退路を絶ってくる。口づけ一つでこんなにも溺れそうになっている事実が信じられなかった。

「————んぐっ!？」

何が起こっているのか分からないほど朦朧としてきたリーサを、突然襲い掛かった激痛が引き戻す。腹の中で何が突き破られたような。思考が一気にクリアになったが、事態が把握できずに恐慌した。顔から血の気が引いていく。

下半身が痛い。額から汗を垂らすリッツが口づけを繰り返しながら、痛みのモトを押

し入れようとしているのだけは理解できた。コン、と下腹部の中のどこかを叩かれたときに、リーサの我慢が弾けた。今日一日で疲れ果て、何が起こっているのかも分からず、とても痛いことをされている現実には憤りと怖さを覚えてしまうと、自分を制御していたがが壊れてしまった。

リーサはぼろぼろと涙を流しながら『悪い言葉』と次々に投げつける。

「いたい、いたいのお！ おにいさまの、ばか！ ばか！ ばか！」

「ごめんな。痛いよな」

眉を下げ、リッツは苦く笑う。だがどこか嬉しそうに見えるのは気のせいだろうか。

「でもな、リーサの大切なものを貰えて幸せだ」

リッツの顔を見たリーサが従兄あにの頭を撫でた。

「ほんとう？ ならしかたない。ゆるすわ。もう、しないで」

「努力する。気持ちいいの、一緒に覚えような」

リッツに何度もキスを落とされ、その合間に体を揺さぶり始めた。ゆっくり引いては奥へ入っていく動作を何度も続けられる。とん、とん、とお腹の一番奥が戻ってくる度にノックされ、リーサは奇妙な違和感を覚えた。

棒が出入りする都度、中が引きずられてずきずきと下腹部は強く痛みを訴えたが、先程よりは何倍もましだった。

中の感覚を必死に拾っていることに気がつく。棒はどうやら真っ直ぐではないらしい。凹凸があつてところによつては太さも異なる。太いところがどこかの場所をこすると、一瞬だけ痛みに勝つて気持ちよさが来る。どこかの場所も移動することはなく、決まった位置であるらしい。

決まったところを通るたびに、リーサの喉から小さく声上がる。するとリッツが頻

繁にそこばかり刺激するようになった。

「んっ、あ、あうっ、あんっ、あっ、いっ……」

段々ひっきりなしに高い声が出るようになる。止めたくても止められない。

リーサの変化に合わせるように、リッツの動きが早くなっていく。こりこりとしたものが摘ままれたり、潰されたりすることで更なる快感をリーサに与えた。

無意識に「……きもち、いっ……」と口走ったのを耳にしたリッツが口許を綻ばせたのにリーサが気づくことはなかった。

リッツの動きが特定の場所を突くことから、奥を叩くことに変わる。胸を揉まれながら最奥の行き止まりらしい場所をしつこくトントンされ、リーサは首を傾げた。違和感しか無いのに何故、と考えていると、棒の太い部分に気持ちいい場所を擦られてしまい思考を中断させられる。

「あう、あっあつ、う、はあっ」

少しずつ規則正しい律動がもたらす気持ちよさを体が覚え始め、きゅうきゅうと棒を締め付ける感触を自覚して恥ずかしくなっていた時に、突然リッツが中を満たしていたソレを抜いてしまう。

「……やつ、」

からっぽのお腹が寂しくなり、再び涙が浮かんでくる。思わず止めようとして腕を掴むと、リッツが顔をしかめながらキスをしてきた。そのまま腰を掴まれ、高い位置に固定される。太腿の裏や膝裏が自分の目で見えるようになったが、股座も良く見える。

そしてさらに重要な事を思い知らされる。

——リッツが間近でそこを見ていて、固くて脈打つナニかを擦りつけている。

この事実を理解すると、秘部から何かがこぼれる感触がした。

リーサははっと息を呑む。

そうか。わたくしは従兄とセックスをしている。ただむやみに痛みを強いられているのではなく、彼に望まれて、自分も望んで受け入れようとしていた。

途中から初めてゆえの混乱や酸欠、何度も極限まで高められてしまったせいで、訳が分からなくなっていた。その結果罵ってしまったけれど、それでも彼は変わらずに優しかった。

リーサは目を細めた。ごく自然に思った。この人が、好きだ。

最悪なタイミングでこんな大切なことを理解してしまったが、そのことを吹き飛ばすくらいに胸を幸福感が満たしている。彼が好き。全部好き。痛い棒だって、彼のものなら好き。

先ほども好意を告げたが、それとは違うものだとうやく判った。家族愛だと考えて

いても受け入れはしただろうが、きつと抱く感情は大きく違ったはずだ。

リッツが太いものを秘部に挿れてくる。まだ痛みはあるが、お腹が熱いもので埋められていく感覚がたまらない。

「はは、ぬるぬるだ」

リッツが嬉しげに言った。先程よりもずっと中が蠢き、彼を求めているのが自分でもよく分かった。恥ずかしいが仕方がないとリーサは受け入れれることにした。

「ひ、あんっ！」

根元どうしがぐつつくと、今までで一番奥が押しあげられた。甲高い嬌声が上がってしまい、リーサは慌てて口を塞いだ。

その様子にリッツが笑った。

「今更じゃないかよ。恥ずかしいのか？」

「――馬鹿！」

「大丈夫。可愛いから」

リーサは齒噛みしながら更に頬を赤らめる。従兄^{あに}にやられてばかりでは気が済まない
ので仕返しをすることにした。

リーサはリッツの耳元でこっそりと告げる。

「すき。あなたに恋してるみたい」

リッツの動きが止まった。放心したようなリッツに頬を包まれ、間近で覗き込まれる。

「……本当か？」

何も話さずにリーサは自らキスをした。それで返事は十分だった。

「わたくしを大切にしてくれないと、離縁してしまうわよ？」

小首を傾げると、「やっぱり悪女かよ」と悪態をつかれる。本人は隠しているつもり

のようだが、目元が赤くなっている。

「当たり前だろ。そんな馬鹿なことをする男に見えるか」

「だって、わたくしの馬鹿で大好きなお兄様ですもの」

「ったく」

リッツが腰をぎりぎりまで引き、大きな音を立てながら打ち付けた。リーサの背が反る。

そのままパンパンパンとやや焦るような律動を始め、リーサを追い詰めていく。既に知られてしまったイイ部分を何度もでっぱりでこすられ、リーサは唇を強く噛んだ。

「傷つく、だろっ、はあ……」

だがリッツが無理に開けさせた口に指を入れてくる。唾液に濡れようともし気にせず、舌を二本の指で挟んで感触を確かめるように弄ぶ。

腰が当たるとたびに秘部から体液が飛び散った。そのうち体を抱きしめられ、より体を密着させてくる。さらに動きが速くなる。

「あ、あつ、ああつ、んひ、あ、も、なんか、きちゃ、くる……！」

中でリッツのものが大きくなったのを生々しく感じてしまい、リーサは彼の名を呼んだ。

「なに、きちゃ……こわい、の、リッツ……！」

「ぐっ！」

リッツが息を詰める。ぐりぐりと最奥を強く押し上げ、そして一気に引き抜いた。

勢いよく白濁がリーサの腹の上に吐き出される。大量の精が下腹から胸のあたりまでを汚し、筋を描きながらシートの上に垂れていく。

リーサは呆然とリッツを見上げる。

「おに、さま……」

失った雄を求めてひくつく秘部を持て余し、リーサは助けを乞う。

リーサは絶頂を迎える事が出来なかった。その事実を素早く悟ったリッツが軽いキスをいくつも落としてくる。

同時に秘部に三本の指が差し込まれ、ぐるりと中を掻き混ぜる。そして親指で陰核を潰しながら、イイところを強く幾度も押した。あと少しというところで止められてしまった快楽が再び高められていく。

「ひいあっ」

リーサが啼いた。

SS その手

リッツとリーサは鮮やかな西日の差す庭園を散歩していた。

かぐわしい花々——特に薔薇の香りを楽しみながら、隣り合って歩いていると、リーサが古い敷石の隙間につま先を取られ、転げそうになった。

慌てて近くの柵に掴まると、リッツに呼ばれる。

「リーサ」

手。

こちらに向かって伸ばされた手を認めると、リーサはにこりと笑った。

その手を静かに押しのけ、リーサは自らの手をリッツに差し伸べた。

リッツは一瞬呆けて、形のよい指先を見つめた。

「わたくしは手を差し出されようと、決して受けないわ。わたくしが伸ばした時、あなたが手を取りなさい」

「何度でも忠誠を誓いなさいってか。高飛車なことだな」

「愚問だわ。女王ですもの」

リッツはひとしきり肩を震わせると、リーサの前にかしずいた。女王の手にそつと触れ、リーサを見据えて告げた。

「生涯の敬慕と忠誠を捧げます。我が女王陛下よ」

低く落ち着いた声だった。

そして女王と同じ面影を持つ男の顔が、ゆっくりと下がる。ささくれ一つない指先に、唇を落とされた。

「受けよう。其は余が忠臣ぞ。ゆめゆめ忘れるな」

女王が承諾の言葉を落とすと、リットバルトは頭を垂れた。

幾度となく交わされた言葉とやり取りは、今も、これからも交わされていくだろう。

西日の色が濃くなった。リッツのしろがねの頭髮や白い肌に陽光が跳ね返り、紅に染まっている。

だがリーサにはお見通しだった。

「年甲斐もなく照れちゃって。おにいさまは可愛いわね」

「……余計な口を減らせ」